

令和6年度

# 研究紀要

第56号

佐賀県小中学校校長会

# 佐賀県小中学校校長会

## 研究紀要第56号

### 目次

- はじめに研究部長 長野篤志 … p1
- I 各種大会における発表資料
- 全九中宮崎大会
- ・ 第4分科会 提言概要 嬉野市立嬉野中学校 校長 山浦修 …… p2
- II 令和6年度 佐賀県小中学校教育研究大会 各分科会報告
- 第1分科会「魅力ある学校経営」…………… p8
- ・ 小学校提言者 唐津市立肥前小学校 校長 渡邊英博
- ・ 中学校提言者 吉野ヶ里町立東脊振中学校 校長 伊東幸一郎
- 第2分科会「創意ある教育課程」…………… p10
- ・ 小学校提言者 佐賀市立金立小学校 校長 副島和久
- ・ 中学校提言者 小城市立小中一貫校芦刈観瀾校 校長 藤田浩巳
- 第3分科会「教職員の指導・育成」…………… p12
- ・ 小学校提言者 白石町立有明南小学校 校長 與賀田忠倫
- ・ 中学校提言者 佐賀市立昭栄中学校 校長 永田康子
- 第4分科会「学校の危機管理」…………… p15
- ・ 小学校提言者 嬉野市立五町田小学校 校長 橋本澄子
- ・ 中学校提言者 唐津市立相知中学校 校長 牛草美佳
- 第5分科会「今日的教育課題」…………… p18
- ・ 小学校提言者 有田町立有田小学校 校長 松尾寛
- ・ 中学校提言者 みやき町立三根中学校 校長 江島裕章
- 令和6年度 研究部員及び研究部対策委員名簿…………… p20

# はじめに

令和6年度 佐賀県小中学校校長会

研究部長 長野 篤志

令和6年8月27日の中央教育審議会答申では、我が国の学校教育と教師を取り巻く環境整備の基本的な方策として、「学校における働き方改革の更なる加速化」「教師の処遇改善」「学校の指導・運営体制の充実」を一体的・総合的に推進する必要があるとされております。また、社会全体に目を向けても、「Society 5.0 時代」など先行き不透明で予測困難な時代が到来し、現在は、その特徴である変動性、不確実性、複雑性、曖昧性の頭文字を取って「VUCA」の時代とも言われています。このような課題に対し、私たち校長は、これまで以上にリーダーシップを発揮し、確固たる経営理念と学校改善に向けた強い使命感をもち、今日の教育課題や各学校の課題に、「社会に開かれた教育課程」「チームとしての学校」「働き方改革」などの視点から、会員相互が連携協力し立ち向かっていかなければなりません。

佐賀県小中学校校長会では、今年度「互いの尊重と協働のもと、しなやかさを持ち、高きに和す、存在感のある校長会」をスローガンに、大会主題「未来を切り拓き、新たな社会を創る日本人を育てる教育の推進」を設定し、研究に取り組んできました。

この研究を推進するために、今年度、県校長会研究部では、全国及び全県の視野に立って学校が直面する課題を解決することを目的に、「校長会理事研修会における教育課題研修会」「佐賀県小中学校校長会教育研究大会」を開催しました。

ここに、「研究紀要第56号」を発行いたします。今年度の、研修・研鑽の成果を、すべての校長先生方へ還元し、今後の学校運営の充実・発展につなげていただければと思います。「研究集録」とあわせてご覧いただき、学校経営の一助とされていただければ幸いです。

最後になりましたが、全国大会や九州大会、そして「佐賀県小中学校校長会教育研究大会」において、ご提言くださった校長先生、それを支えてくださった各地区研究対策委員をはじめとする各地区校長会の皆様、ありがとうございました。そして、研究紀要発行にあたり、「佐賀県小中学校校長会教育研究大会」において、各分科会の記録を取りまとめていただいた記録者の校長先生、ありがとうございました。

また、すべての校長先生方に御礼申し上げますとともに、さらなるご健勝と佐賀県小中学校校長会の益々の発展を祈念いたします。

## 第4分科会（1）

研究主題 「自己理解を促し、将来にわたって人としての生き方を深める生徒指導と  
キャリア教育の充実」

自他を敬愛し、他者と協力しながら自己実現を図るための自己指導力を育成する生徒指導の充実

提案者 佐賀県 嬉野市立嬉野中学校 校長 山浦 修

### はじめに

嬉野市は、佐賀県の西部に位置する市で、市の西側は長崎県と接している。市には、日本三大美肌の湯として有名な嬉野温泉と伝統的建造物群保存地区に指定された古い町並みを残す塩田津が所在している。2006年1月1日に嬉野町と塩田町が合併して嬉野市となり、人口は現在約2万5千人である。



写真1 公衆浴場シーボルトの湯

本校のある嬉野市嬉野町は、「うれしの茶」が特産品で、2023年の全国茶品評会では農林水産大臣賞を受賞した。また、2022年9月に開業した西九州新幹線は、嬉野温泉駅を利用する観光客をよび、温泉旅館やホテルの集客につながり、町としての賑わいも大きくなりつつある。

嬉野市には4つの公立中学校があり、本校は嬉野町の中心部に位置した全校生徒313名の中規模校である。2007年度からコミュニティ・スクールの指定を受け、学校運営協議会において学校教育目標やその具体的方策等について審議し、地域とともにある学校づくりを推進している。



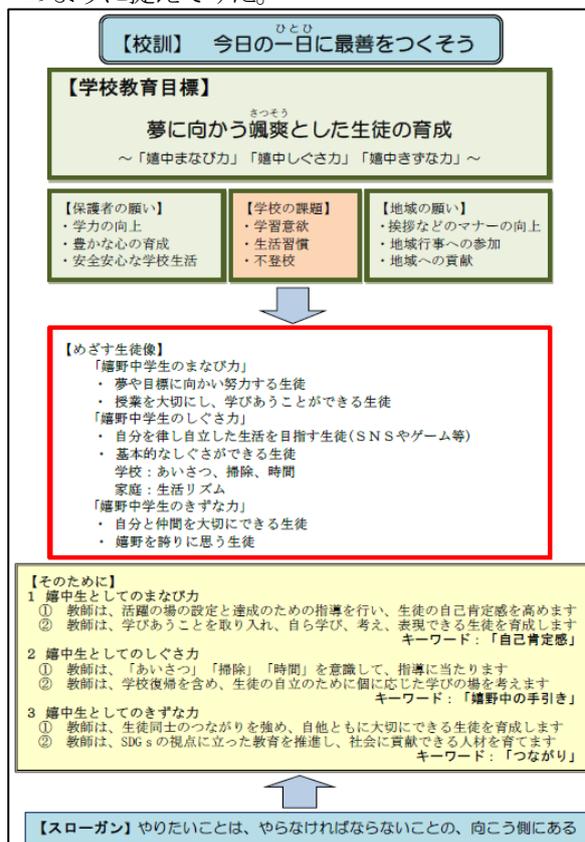
写真2 堤に入り鯉を捕まえている生徒

写真2は、「堤干し・鯉つかみ」の様子で、コロ

ナ禍を経て5年ぶりに復活した1年生の学年行事である。稲刈りが終わった後、堤の水を抜いて行う行事で、地域の方の理解と協力ができない。本校生徒は、地域の方から愛され、見守られながら成長している。

### 1 主題設定の理由

情報技術革新に起因する環境の変化は、生徒の心身の発達にも影響を与えていると指摘されている。具体的には、人間関係をうまく築くことができない、自分で意思決定できない、自己肯定感をもてない、将来に希望をもつことができない、などが挙げられる。本校でも同様の課題があり、この現状に立って、生徒の自己指導力の育成のために大切なことを、学校教育目標と関連付けて、次のように捉えてみた。



資料1 2024年度嬉野中学校グランドデザイン

1点目は、ありのままの自分を肯定的に捉える「自己肯定感」や、他者のために役立った、認められたという「自己有用感」を育成することである。生徒の社会的な自立を目指すための根底をなす部分だと言える。

2点目は、課題を発見・分析し、適切な計画を立ててその課題を処理し、解決する力、いわゆる「課題対応能力」の育成である。この経験の積み重ねが、社会の変化を恐れず、変化に対応していく力と態度を育てる。

3点目は、人間関係をうまく築くことができない生徒や原因が多様化している不登校生徒への支援の在り方の追究である。他者と協力することを含めて、様々な場面で生徒にとって最適なつながりを構築することは、大切な使命である。

以上のことから、本研究主題を設定した。

## 2 研究の視点

本校では「夢に向かう颯爽とした生徒の育成」を学校教育目標に掲げ、生徒に身に付けさせたい力を「嬉中まなび力」「嬉中しぐさ力」「嬉中きずな力」の3つに分けて、それぞれにめざす生徒像を具現化している。

そこで、次の3つのキーワードを研究の視点として、2021年度からの取組を整理し述べていく。

- 「嬉中まなび力」キーワード ① 自己有用感  
 「嬉中しぐさ力」キーワード ② 課題対応力  
 「嬉中きずな力」キーワード ③ つながり

## 3 研究の実際

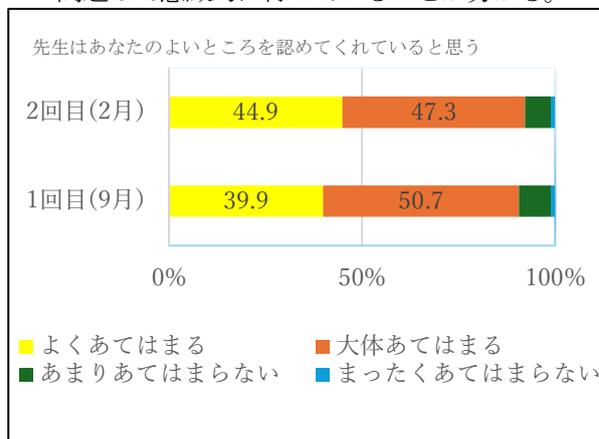
### (1) 「嬉中まなび力」キーワード ① 自己有用感

2021年4月、着任早々に「入学式を生徒による司会で行う」ということを提案した。職員からは、儀式である入学式を生徒司会で行うと、重みがなくなるので、従来の職員による司会進行の方がよいという意見が多く出た。自己有用感を高めるには、「出番」「役割」「承認」を意識して指導に当たる必要があり、入学式という大きな学校行事に「司会」という役割を生徒に与えることに大きな意義があることを訴えたが、2022年度までの2年間、私の意見は通らなかった。

一方で、生徒に「出番」「役割」を与えることの重要性は、職員が意識するようになり、集会等が、少しずつ生徒による司会進行に変容していった。「赴任式」「辞任式」「始業式」「終了

式」「全校集会」「講師を招聘した学習会」など、今までは職員が進めていた集会のすべてが、生徒による司会進行になった。そして、2023年度からは、入学式も生徒による司会進行となった。

職員が、「出番」「役割」「承認」を意識することで、生徒を指導・支援する機会と褒める機会が増え、機会が増えたことで、職員の意識も高まっていったと判断している。次のデータは2023年度の学校評価の結果である。「先生はあなたのよいところを認めてくれていると思う」という質問に対して、肯定的に回答している生徒の割合は90%程度と比較的高い。また、1回目より2回目のデータの方が高くなっていることから、承認する（褒める）ことを年間通して意識的に行っていることが分かる。



資料2 学校評価アンケート結果

また、司会進行を体験した生徒の感想からも自信を感じさせる内容が多かった。

- ・自分に自信がつき、勇気をもらい、次の人に与える勇気のリレーができていると思った。
- ・周囲に伝わる大きさの声で話すことに慣れ、多くの人の前で話すことに慣れた。
- ・人前で話すことが苦手だったけど、今では少し自信につながっている。
- ・みんなの前に立つ機会があるのは、よい経験になると思った。

資料3 生徒の感想

校長として心がけたのは、「出番」「役割」を設定してほしいことを、職員に言い続けたことである。たとえば、「学年行事は生徒によってできないか」「全校集会等の整列指導も生徒に」などである。また、人事評価表の具体的取組の中に、生徒の「出番」「役割」を意識的に組み込んでほしいことをお願いした。

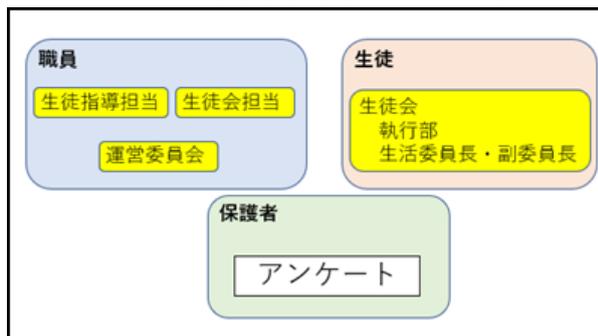
(2) 「嬉しぐさ力」キーワード ② 課題対応力

本校では、2019年度に嬉野中学校制服検討委員会を設置し、スカートを着用することに違和感を覚える生徒への配慮や機能的な問題を考慮した制服のあり方について検討を行った。生徒・保護者・職員・地域の方の意見を参考に、2020年度よりブレザータイプの制服を採用し、上衣・ポロシャツは性別のない共通のものに、スラックスとスカート、キュロットは生徒が選択できるようにした。

また、近年では厳しい校則は、生徒の人権を侵害しているとも言われ、社会環境や生徒の状況の変化に応じた校則の見直しが求められている。一方で、校則によって安心した学校生活を送ることや、中学生としてふさわしい規範意識を育てることができていることも事実である。ここでは、2022年度に取り組んだ校則の見直しを紹介する。

ア 見直しの体制と取組の流れ

次の資料4のような体制を作り、資料5の計画のもと、校則の見直しを進めた。



資料4 校則の見直しのための体制

時期	大まかな流れ	内容
8月下旬	①計画の提案	・運営委員会(職員)において進め方の決定 ・事前アンケートの内容を提案
9月	②見直す項目を決定	・生徒、保護者、職員に対し事前アンケートを実施 →生徒会で、事前アンケートの集計と分析 ・見直しを行う項目を決め、職員会議で提案
10月～11月	③意見を集める	・シールを用いたアンケートで意見を収集→学級で討論会 ・職員へのインタビューや文献調査
12月	④新規定の提案	・生徒総会で生徒会から新規定の提案
1月	⑤新規定の試行	・1月を試行期間として、新規定に沿った靴下の着用
2月～3月	⑥振り返り	・事後アンケートの実施 ・校則見直しの活動の振り返り

資料5 校則の見直しの流れ

イ 見直す項目

9月、「見直す項目を決める」ために全校生徒、保護者、職員の三者に対して事前アンケートを行った。結果、「下着の色」「春と秋のセーターの着用」「靴下の色・長さ」の3項目において、三者ともから「困っている」という回答が多かった。「下着の色」と「春

と秋のセーターの着用」については、生徒同士の話し合いの困難さと時期的な問題から職員が主体となって改訂を行った。「靴下」については、生徒会が主体となって見直しを進めることとした。

ウ 見直しの実際

「靴下」をどのように見直していくかという意見を集めるために、全校生徒にシールを用いたアンケートを実施した。事前アンケートの自由記述で「長さの基準が曖昧だ」という意見や「白は汚れが目立つ」などの意見が出たことから靴下の「色」と「長さ」に絞って、アンケートと討論会を実施した。



写真3 シールを用いたアンケート調査

シールを用いたアンケートは、写真3の左のように「学校という場に適切と思うところにシールを貼ろう」というものである。ここでの意見をもとに、討論会という形で、写真4のように学級生徒会を行った。



写真4 学級生徒会の様子

職員には、生徒会役員がインタビューを実施して意見を集めた。

そして12月に、生徒会執行部と生活委員長・副委員長が中心となって、これまでの取組を総括して、靴下に関する新規定を検討し、提案した。

【新規定】

- ①男女共、無地で白・紺・黒。スカートに黒タイツ着用可。ただし、式典の時は白。
- ②長さはくるぶしが隠れる程度。  
(目安：かかとから10cm以上)

資料6 靴下に係る新規定

コロナ禍で全体が集まるのが難しかったため、リモートで生徒総会を行い、承認を受けた。



写真5 リモートによる生徒総会の様子

その後、1か月間は、新規定の試行を行い、1月末に振り返りアンケートを行った。2月～3月の間は、導入するための準備期間として、新・旧規定両方を適用し、2023年4月から新規定へ完全に移行した。

#### エ 保護者の考え

保護者の意見を尊重するために事前アンケート・事後アンケートをオンラインで実施し、多くの回答を得た。実際に、事前アンケートは、223名(79%)、事後アンケートは172名(61%)の回答を得ることができた。自由記述欄を設け、「白の靴下は汚れが残り、洗濯が大変」「長さの規定があいまいで購入時の判断が難しい」など、保護者の視点からの困りごとを把握することができた。また、アンケートを通して、保護者にも校則の見直しに参加してもらったことは、保護者の当事者意識の向上と見直し後の満足感につながった。

#### オ 職員の考え

職員の意見を把握するために、「生徒」「保護者」と同じ項目で事前アンケート・事後アンケートを実施した。これによって、生徒に指導をする上での困りごとを洗い出すことができた。具体的には、「靴下の長さの規定があいまいで、指導が難しい」や、「ルールがある以上、全職員で指導すべきだが、色々な特性をもつ子どもたちがいるなかで、一貫した指導が難しい場面がある」という声が上がった。アンケートを実施する前は、校則を見直すことに難色を示したり、校則の見直しに係る生徒の意見を尊重することの危うさを感じたりする職員も一定数いた。しかし、生徒や保護者の意見をもとに、話し合いを重ねることで、職員全体としての意見が徐々にまとまり、校則を見直すことに対する意識も変わっていった。

#### カ 取組を通して

校則に対しての問いで、「大変・おおむね満足」と回答した人の割合は、見直しの事前と事後で、次の表のように推移した。

対象	事前	事後	増減
全校生徒	60%	88%	+28%
保護者	68%	92%	+24%
職員	84%	86%	+2%

三者の意見を聞きながら手順を踏んで丁寧に進めたことで、それぞれの満足度が高くなった。

特に、生徒の満足度が上がったのは、アンケートに実際に答えたことで、校則の見直しを身近に感じ、学級生徒会などを通して、見直すための手続きを実際に体験したからではないかと推測する。

校長として心がけたことは、職員間の話し合いを大切にしたことである。見直しを進める前の話し合いを丁寧に言い、職員の意識改革に努めた。

#### (3) 「嬉中きずな力」：キーワード③ つながり

##### ア 校内研究を通して

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、マスクの着用や給食の黙食、3密の回避など、さまざまな制限がなされ、生徒同士のコミュニケーションが少なくなった。そのため、授業の中での学びあいや学級活動での話し合い活動が、不十分なままに終わってしまうという実態が見られた。

そこで、2023年度の校内研究のテーマを、自ら学び、考え、表現できる生徒の育成～対話的な学びの実現を通して～という内容にして、特に対話的な学びを授業の中に意識して取り入れていくことを共通理解し、実践した。具体的には、次の3点に焦点を絞って研究に取り組んだ。

- ① 言語活動を適切に取り入れた授業づくり
- ② 支持的風土のあるよりよい集団づくり
- ③ 個に応じた効果的な指導・支援

その結果、「授業のグループ活動などで、自分の考えを表現することができている」という生徒の割合は85.2%、「授業の話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり広げたりすることができている」という生徒の割合は88.8%と、肯定的な回答の割合が

大きかった。授業における対話的な学びが、生徒の学習への意欲の向上や理解の深まりにつながったと言える。また、全職員で取り組む事柄を共通理解し、確実に実践したことで、対話的な学びの質の向上につながった。

今年度は、支持的風土のあるよりよい集団づくりと、個に応じた効果的な指導・支援を継続して行いながら、「つかむ⇒やってみる⇒振り返る」のプロセスを踏んだ授業づくりを行い、対話的な学びをより充実させる方法を探っている。すべての生徒が互いに学びあい、わかる実感が得られるよう、研究を進めている。

#### イ 不登校生徒とのつながり

不登校生徒への支援は、「学校に登校する」という結果のみを目標にするのではなく、生徒が自らの進路を主体的に捉え、社会的に自立する方向を目指すように働きかけることが求められている。

嬉野市では、2023年度から教育委員会の指導の下、タブレットによるオンラインでの授業参加を出席扱いとすることになった。これは、保護者、学校の双方が生徒の学習活動を肯定的に認め、その努力を温かく見守り、支えることで、生徒自身が「今の自分」を認め尊重し、前向きな気持ちや「学び」への意欲を呼び起こし、維持する動機づけになることを目的としたものである。文部科学省が示す不登校生徒が自宅においてICT等を活用して学習活動を行った場合の出席扱いとする7つの要件や、嬉野市立小中学校における出席扱いの判断基準に照らし、校長が判断するとなっている。出席扱いと認めるためのいくつかの要件を保護者との面談を通して確認し、その了解を取ることが前提にある。この取組が不登校を助長することにならないようにするため、市内の校長会でも検討を重ねた。

本校でも、2022年度末に、保護者との面談を実施し、資料7等による学習活動の確認を行い、タブレットによるオンライン学習を出席として取り扱った。その生徒は、2022年10月にオンラインによる授業参加を開始したので、その日まで遡って出席扱いとした。2024年度も、この制度に係る保護者面談を既に実施し、オンラインによる授業参加の回数が増えつつある。

～ 自宅でICT等を活用した「学習活動」を行うに当たって～

◇ 目的

〇〇さん自身が決めた「学習活動」を保護者、学校の双方が肯定的に認め、その努力を温かく見守り、支えることで、〇〇さん自身が「今の自分」を認め尊重し、前向きな気持ちや「学び」への意欲を呼び起こし、維持する動機づけになることを目的に行います。

◇ 〇〇さんの「学習活動」の内容、1日の「学習」量と「学習」時間

「学習活動」の内容	
「学習」量	
「学習」時間	

◎ ネット環境に接続した「学習活動」を行う際の不適切な接続や必要以上の長時間使用にならないことの管理も含めた、温かい見守りと承認のお声かけの御協力を、是非、お願いいたします。

◇ 「学習活動」の確認方法

☆ 学習活動の「あしあと」

期日・校時	校時	視聴時間	時	分	～	時	分
教科等							
めあて							
まとめ							
振り返り							

#### 資料7 学習活動の確認

#### ウ 地域とのつながり

本校は、2007年度からコミュニティ・スクールの指定を受け、地域とともにある学校づくりを推進している。冒頭で紹介した「堤干し・鯉つかみ」や「うれしガーデン」、「吉田焼絵付け体験」など、地域の方の協力・支援をいただきながら、学校行事として行っている。「うれしガーデン」とは、嬉野に来られた方を花でもてなすという趣旨で作られた花壇で、嬉野インター近くにあつて、毎年2回、地域の方と一緒に花苗を植えている（写真6）。



写真6 うれしガーデンの定植と咲いている様子

2019年度に行った嬉野中学校制服検討においては、学校運営協議会の委員の方の意見も参考にしながら、地域の方の声として、

制服の変更反映することができた。また、制度上、学校の教育目標について承認を受けるという仕組みがあるので、今年度は、委員の皆さんと一緒に考え、資料8のような意見をいただき、グランドデザインに反映した。

- ① 不登校生徒に対して、学校復帰ばかりを求めるのではなく、個に応じた支援に徹して、社会的な自立を目指すべきである。
- ② 他者への思いやりなど、仲間との絆を大切にすることも必要ではあるが、まずは自分を大切にすることが重要である。
- ③ 地元の者としては、嬉野を誇りに思う生徒になってほしいという願いがある。

#### 資料8 学校運営協議会で出された意見

校長として心がけたことは、学校を変えるのは授業であり、授業を核として「生徒同士のつながり」を大切にしたい点である。また、学校運営協議会において、学校の教育目標を、委員の方と一緒に検討する場を設定したことである。

#### 4 成果と課題

以上のような取組により、成果と課題について、次のようにまとめる。

##### (1) 成果について

ア 今年度、本校に転入した職員が、「入学式の生徒司会を初めて見たが、すばらしかった。よい取組であると感じた」と述べ、新入生の保護者からは、「入学式、子どもたちの手で作り上げたように感じて、とても良かった」という感想をいただいた。

2022年度、コロナの影響から体育大会でダンスのような集団演技がなくなった。すると、体育委員長らが、全校生徒への指導は自分たちがするから、開会式のラジオ体操をダンスに変えてほしいという提案をしてきた。職員からは時間がないということで、反対の意見も出たが、任せてみたところ、3年生全員が、1・2年生の指導者となって、見事に成功させた。生徒の自主的な活動が実を結び、会場からはその日一番の拍手が沸き起こった。

これからも、「出番」「役割」「承認」を大切に、生徒の自己肯定感や自己有用感の向上を図りたい。

イ 「校則の見直しを通して、何か変化はあり

ましたか？」という質問に対して、「自分たちの思いが先生方に届いて校則が変わったことにより自分たちの人権が守られていると思った」や「私達の意見が尊重され校則がよりよいものになった」という記述が見られた。生徒は、話し合いを重ね、手続きを踏んで校則の見直しを行った結果、課題を解決できたと実感した。

ウ 校内研究を通して、全職員で対話的な学びに取り組んだことで、授業中の生徒のつながりが機能して、学力の向上につながりつつある。オンラインで授業に参加した生徒の中には、学校復帰を成し遂げ、希望の進路に進むことができた者もいる。個に応じた支援ということの重要性を改めて感じた。

##### (2) 課題について

ア 2023年度の学校評価アンケートの「将来の夢や目標をもっている」という項目の肯定的な回答結果が、74.8%と低い。2022年度の72.9%よりは、若干向上しているが、「夢に向かう颯爽とした生徒の育成」に、今後も粘り強く取り組む必要がある。

イ 校則を見直すという手続きを、生徒に体験させることは、学校の学習と社会との関連を学ばせることにつながる。校則については、「生徒」「保護者」「職員」の三者で、継続的に考えていくことが大切である。また、校則を考えたとき、どこまでが学校の指導の範疇であるのかと思うことがある。学校が担うべき業務の精選のためにも検討すべき視点ではないだろうか。

ウ タブレットによるオンライン学習の評価の在り方や不登校の生徒にとってどんなつながり方が最適であるのかなど、今後、継続して検討していくことが大切である。

#### おわりに

現在、教職員を希望する人が少ないということが喫緊の課題になっている。一方で、学校が担うべき業務の精選はなかなか進まない。今回の提案によって、これまでの歩みを振り返り、あらためて教職の魅力や醍醐味を感じ取ることができた。このような魅力や醍醐味を発信し続けることが教職員の志願者を増やすことにつながると信じ、結びとする。

# 第1分科会（小学校・魅力ある学校経営）記録

提言テーマ「キャリアステージに応じた資質・能力や『チーム学校』への  
参画意識の向上を図る研修の推進」

～教職員一人一人が主体的に学校運営に参画し

組織的に教育力を向上させる学校の在り方～

提言者〔唐津市立肥前小学校 渡邊 英博〕

司会者〔神埼市立千代田中部小学校 平山 忠直〕

記録者〔唐津市立玉島小学校 松尾 信広〕

## 【研究協議題】

- ・教職員一人一人の資質・能力を發揮させるための校長のかかわり方について
- ・校長の学校マネジメントを助ける人・妨げる人について

### 1 質疑応答

- ・とくになし

### 2 グループ協議報告（欠席者多数のため、小学校グループは3グループのみ）

#### (1) Bグループより

- ・一人一人との対話を大切にし、職員を理解し、その人を最大限に生かせるポジションにつけることを心がける。対話の時間がとれない場合は、何人かに絞ってじっくり話を聴くことも必要。また、人事評価の目標設定時の面談にも時間をかけ、丁寧に指導や助言を行う。人事評価に書かれていないことを頑張っている職員もいるので、その姿も見守る。
- ・現状を考えると、職員数が足りているだけで助かっている。不足時は非常勤対応、未配置のままの学校もある。また、新採を育てる難しさも痛感している。地域の方は「助ける人」である。どこまでかかわっていただくかを考えながら活用を促していきたい。

#### (2) Cグループより

- ・若手を一から育てていく必要がある。意欲が高い人もいれば、学級崩壊等で悩んでいる人もいて様々。三役やメンター等で効果的にかかわったり、人事評価を活用したりしながら対応していきたい。また、会議等での職員からの意見は必ず受け止めるようにしている。
- ・職員一人一人を丁寧にマネジメントしていくことが、学校力の向上につながる。一見、学校マネジメントを「妨げる人」こそ仲間として受け入れ、「助ける人」に変容させたい。若手の困難な状況を見て頑張ってくれているベテランの存在は大きく、感謝している。また、事務職員も「助ける人」として重要視しており、できるだけ情報共有をしている。

#### (3) Dグループより

- ・年度初めのヒアリングを大切にし、校長からミッションを伝えることで、自分の役割を意識させる。担任配置を考える際は、児童と担任との相性などにも配慮しつつ、その職員の強みが生かせるように心がける。
- ・ベテランに若手育成の意識をもってもらおう。そのために、指導教諭も入って問題点を一緒に洗い出し、若手のカバーやフォローを行うようにする。また、メンターミーティングも定期的に行う。このように、人材育成や個々人の強みを生かす場所を明確にすることで、結果的に学校マネジメントを「助ける人」を生み出すことにつながる。

### 3 まとめ

提言の最後に「どこでもやっていることですから。」と言われていた。私は校長として まだ経験が浅く、日々の学校経営や運営を自分が行っているというより、これまでの学校の動きや流れに沿って進めているといった向きがある。それを今日ご提言いただいたような一つの資料に整理すると、校長として「何のために何をやっていて、これからどうしていくのか。」が明確になると感じた。提言資料の中にある「学校自体を教師の学びのコミュニティと捉える」というチーム学校の捉え方の一つを端的に表した言葉が、大変印象に残った。

# 第1分科会（中学校・魅力ある学校経営）記録

提言テーマ「落ち着いた学校づくりに資する学校経営マネジメントの取組」

提言者 [吉野ヶ里町立東背振中学校 伊東 幸一郎]

司会者 [神崎市立千代田中部小学校 平山 忠直]

記録者 [神崎市立神埼小学校 廣瀧 由紀子]

## 【研究協議題】

- ・ 落ち着いた学校づくりに資する学校経営（人事評価）について
- ・ 落ち着いた学校づくりに資する学校経営（人材育成）について

## 1 質疑応答

- ・ とくになし

## 2 グループ協議報告

**Eグループより**（欠席者多数のため、中学校グループは1グループのみ）

- ① 教職員一人一人の資質・能力を発揮させるための校長のかかわり方について
  - ・ STであると何でもできるものが考えていたが、実は、得意な分野と苦手な分野があるということの見極めがうまくできなかった。
  - ・ 職員の本音をなかなか聞き出せないところがある。ここをしっかりとっておかないと（深い部分を読み取っておかないと）先々、職員がきつくなると感じる。
  - ・ コミュニケーション力が高い低いなど、職員の強みや弱みをとらえておく必要があり、その職員の能力を発揮させるためには、仕事の量や立場、プライベート等の背景を把握しておく必要がある。
  - ・ 普段の様子を観察しながら、機を逃さない対応が必要である。
  - ・ 学校内外だけでなく外部の人材を活用した対応も効果的ではないか。
- ② 校長の学校マネジメントを助ける人・妨げる人について
  - ・ まずは、校長と教頭の関係が良好であることが何より大切である。
  - ・ 教頭を職員から頼りにされる人に育てていくことが校長に求められていることだろう。
  - ・ 教頭に対して、校長がマネジメントをどれくらい理解させられるかが「鍵」
- ③ 人事評価と人材育成について
  - ・ 中間面談で意見をかわすことで深めさせたいし、深めさせることができる。
  - ・ 校長一人でやるのではなく、教頭と共有しながら進めていくことが重要。
  - ・ 職員をしっかりとほめたうえで、課題を伝えることで意欲を高めさせる。
  - ・ 職員（大人）も承認欲求は高い。これを生かすこと。

## 3 まとめ

文字通り「提言」であった。私たちが言いたくてもうまく言えない、表現できないことについて明確に示していただいた。これまでの伊東校長先生の歩みを大きく感じた。専門は、国語科ということもあり、「言葉」に厳しく、我々が何気なく使っている「言葉」を改めて定義することの大切さを感じた。概念を言葉や図にして、明確にしていくことは学校経営・運営をしていくうえで、大きなポイントとなると教えていただいた。提言にある「当たり前を疑え」という言葉が大変印象的だった。

# 第2分科会（小学校・創意ある教育課程）記録

提言テーマ「地域との連携・協働を図る教育課程の編成と運用」

～「社会に開かれた教育課程の実現」を目指して～

提言者 [佐賀市立金流小学校 副島 和久]  
司会者 [小城市立三日月小学校 西村 雪彦]  
記録者 [佐賀市立中川副小学校 熊本 万里子]

## 【研究協議題】

- ・ 持続可能な地域との連携・協働の在り方について
- ・ 地域資源を生かした教育課程の編成について

## 1 質疑応答

- ・ 進行の都合により、質疑応答はありませんでした。

## 2 グループ協議報告・まとめ

### (1) Aグループより

- ・ コミュニティスクールの委員が不足し、運営面で職員に負担がある。
- ・ 地域との行事が増え、関わりがやや強くなってきている。持続可能な連携・協働を進めていくためには、できることとできないことをきちんと伝え、理解を促していく必要がある。
- ・ 働き方改革の改革も必要である。

### (2) Bグループより

- ・ 地域とのつながりや活動が点になっている状態であるため、組織立てていきたい。
- ・ PTA担当は教務、地域コミュニティは教頭と分担しているが、コミュニティ事務局に専任職員がいるので、学校の負担は少ない。ただ、活動の主体が学校なのか地域なのかはっきりしないところがあり整理が必要である。
- ・ 学校運営協議会は、学校以外の視点で学校運営についてクリエイティブな発想など様々な意見を出していただきたいが、助言をもらえる場には至っていない。

### (3) Cグループより

- ・ 地域の方の高齢化から、次の担い手をどのように繋いでいくかが課題である。
- ・ 地域と学校のwinwinの関係作りが必要である。実際、感謝の会や発表会でお世話になった方にお礼伝える機会を設けたり、協力者の写真を掲示したりすることで満足感につなげることができている。
- ・ 職員の経験値が変化しているため、教育課程にどのように組み込むことがいいのか難しさがある。また、固定化してしまうと探究的にならないという問題点もある。

### (4) Dグループより

- ・ 持続可能な地域との連携を行っていくためには、地域共同推進委員や地域コーディネーターなどの存在が不可欠であり、コーディネーターが活動を引き継ぐ担い手となっている。
- ・ 活動が点と点にならないよう教科横断的なカリキュラムの作成が必要である。
- ・ カリキュラムを可視化することで、様々な活動を次年度に引き継ぐことができる。

### (5) まとめ

- ・ キーワードとして双方向、地域とのつながり、目的明確化、地域の方の高齢化などがあげられ、これらのキーワードをいかに構造化して教育課程を構築していくかがこれからの課題である。

# 第2分科会（中学校・創意ある教育課程）記録

提言テーマ「学校・地域のよさを生かした教育課程の編成・実施について」

～地域と共に育む教育の推進を目指して～

提言者 [小城市立芦刈中学校 藤田 浩巳]  
司会者 [小城市立三日月小学校 西村 雪彦]  
記録者 [小城市立牛津中学校 平石 義治]

## 【研究協議題】

- ・ 持続可能な地域との連携・協働の在り方について
- ・ 地域資源を生かした教育課程の編成について

## 1 質疑応答

- ・ 進行の都合により、質疑応答の時間はありませんでした。

## 2 グループ協議報告・まとめ

### (1) Eグループより

- ・ 地域資源を活用した教育活動（農業体験など）は、地域貢献の機会として有意義だが、効果的な学びに結びつける必要がある。
- ・ コーディネーターが継続的な地域連携の窓口を担うことで、学習活動を持続可能な形にすることが重要。
- ・ 地域と学校がお互いに無理をしない活動の計画を立てる
- ・ 具体例として、体験活動を教科教育に結びつけるカリキュラム設計の取り組みが挙げられた。
- ・ 学校と地域の役割の整理と施栓が必要。
- ・ 地域のニーズを知ることと学校のニーズを知ってもらうことが大切。

### (2) Fグループより

- ・ 地域コミュニティとの連携強化が重要。特に後継者不足や地域の高齢化に対する対策が必要。
- ・ 地域貢献の感謝イベントを実施し、地域の方々とのつながりを深める活動が報告された。
- ・ 若手教員の意見を取り入れながら、総合的な学習に地域との連携を組み込む工夫を検討中。
- ・ 活動が地域貢献につながっているのか、検証することが必要。
- ・ 総合的な学習の時間に地域貢献活動を組み込むことで、平日の活動となり、職員の負担が減った。
- ・ 校内でのコーディネーターの設置と地域の後継者の発掘と加入の促進。

### (3) まとめ

○地域と連携した活動をどのように教育課程に位置づけ、持続可能な形にするか。地域と学校の目的を明確化し、公平性を保ちながら連携を進める必要がある。学校にとっても地域にとってもよりよい関係とは何かを探していきたい。

# 第3分科会（小学校 教職員の指導・育成）記録

提言テーマ「教職員が学び合い高め合う学校づくり」  
～組織で育てる学校経営を通して～

提言者〔白石町立有明東小学校 與賀田 忠倫〕

司会者〔佐賀市立春日小学校 原口 浩一〕

記録者〔白石町立六角小学校 中武 友子〕

## 【研究協議題】

- ① 人材育成を意識した組織づくり
- ② 人材育成を意識した研修の持ち方
- ③ ステージごとの人材育成のあり方

## 1 質疑応答

なし

## 2 グループ協議報告・まとめ

### (1) Aグループより

- ・ 学校規模で組織や学校課題が違う。小規模の学校になれば、学校だけで研修を深めるのは難しい。中学校校区内でやりとりをしながら研修を深めたり、合併が決まっている学校では合同で研修を行ったりしている。合同で行う場合、誰が中心になるかが大切になる。
- ・ 若手育成に関しては、指導案作成よりも、教材研究や授業実践についてみんなで考えていくことが大切だと考える。小さい学校では相談する相手がいないところが課題。主任制、チーム制が今後必要になるのではないだろうか。

### (2) Bグループより

- ・ 小規模校の学校では、若手が相談しやすい体制づくりが必要となる。グループ学年主任制は参考になった。
- ・ OJTを中心に研究を進める学校では、それぞれの職員が、学期ごとに自分のテーマとメンターを選び、主体的に学べる体制をつくっている。職員同士の会話が増え、学び合う雰囲気の醸成につながっている。

### (3) Cグループより

- ・ 人材育成も必要だが、継続させる・辞めさせないこと、子供に思いっきり向き合わせて教職が楽しいと思わせること、自信を持たせることが大切。そう思わせるように、声を掛けていく必要がある。

### (4) Dグループより

- ・ 人材育成のためには、教育委員会や事務所との連携が必要となる。教員自身に「学びたい」という意欲を持たせたい。学級の枠を払うグループ主任制や乗り入れ授業等の工夫をしたい。チーム担任制は、担任と合わせられない子供が減ったり、担任の得意・不得意を加味して分担することで負担感が減ったりするメリットがある。

### (5) Eグループより

- ・ 小規模校で若手育成をどう進めていくのが話題になった。佐賀市の研修会に参加した30名は若手同士が伸びやかに発言し合える雰囲気があったそうだ。校内研修でもそのような雰囲気が必要。失敗が許されない雰囲気ではなく、授業を見る観点だけしっかり決めて、失敗を語るができる校内研をつくっていく必要がある。

- ・ 校長の役目としては、従来の固定観念を壊していく必要があるのではないか。三瀬中学校では数学を3学年合同で進めているそうだ。若手の自由な雰囲気を支えられるよう、考えの転換を図っていく必要がある。

#### (6) Fグループより

- ・ 人材育成を意識した組織づくりと研修の持ち方について話し合った。若手育成を大切に、主任クラスに若手職員を任せたい。しかし、弊害もあり、前例踏襲になりがちのため、ベテランのアドバイザーとなる職員を配置する必要がある。若手を登用することで、壁を壊し、若手が壁にぶつかったときにフォローできる組織にしていきたい。

#### (7) まとめ

今回の研修会は、小中別のグループ協議であったが、2つの事例発表を基に校種の壁を越えて人材育成の協議ができ、有意義だった。今後もこのような形での教育研究大会を続けていければと思う。

# 第3分科会（中学校、教職員の指導・育成）記録

提言テーマ「教員の資質能力の向上を図る人材育成の在り方について」  
～協働型主体的課題解決学習推進チームさかの取組を通して～

提言者 [佐賀市立昭栄中学校 永田 康子]  
司会者 [佐賀市立春日小学校 原口 浩一]  
記録者 [佐賀市立金泉中学校 空閑 宏史]

## 【研究協議題】

- ① 人材育成を意識した組織作り。
- ② 人材育成を意識した研修の持ち方。
- ③ ステージごとの人材育成の在り方

## 1 質疑応答

Q1 なし

## 2 グループ協議報告・まとめ

### (1) Aグループより

- ・各学校の現状共有（学校規模で組織作りは違う）  
→小規模校は、自分の学校だけで研修を深めるのは厳しい。それを、中学校区で行うと、小中連携や研究指定校の取組を自校にいかすことができる。
- 但し、校区でのとりまとめは誰がするか、分担と調整が必要である。効率的に行うためICT機器の利活用（チャット、マイクロソフトクラスルームの活用）が効果的である。
- ・若手育成  
→指導案を書けない若手に、授業準備と指導内容の検討を学年全体で行う（チーム制が有効）。これにより、若手の負担を減らし教材研究等の時間を生み出すと共に、周りの教員も授業準備を合理的に進めることができる

### (2) Eグループより

- ・人材育成と研修のもちかた  
→小規模校は、若手が多い。どのように育成するかが今後の課題。佐賀市の協推さが300人の参加は、ほぼ若手と聞いた。若手同士で伸びやかに発言できる雰囲気が良い
- 従来の校内研修は、指導案の様式を細かく定めて、ある面柔軟性に欠けていた。ざっくりの指導案の作成でも良いのではないか。各教員が、失敗を恐れず失敗を語れる校内研が必要ではないか。
- 校長が今までの固定概念を崩す必要があるのでは。3学年合同の学び合いの授業等も参考になる。

### (3) Fグループより

- ・人材育成を意識した組織作り・研修のもちかた  
→若手育成を重視し、主任は若手が良いのでは。今回の学習指導要領改訂のような大きな変革期は、ベテランは過去の経験に縛られてなかなか対応ができない。そこに若手の柔軟性はとても有効。但し、旧来の学校全体のシステムを変えていくためには、ベテランのアドバイザーがいる。
- 働き方改革で会議を減らした結果、組織が機能しなくなっている。長期在勤者の発言力が大きくなったり、異動でいなくなった後が機能不全に陥ったりしている。小規模校であっても組織作りは必要。
- 私たちの世代は、若いときに教務主任・生徒指導主事を経験してきた。今の若手教員にも活躍の場を設ける必要がある。

### (4) まとめ

今回の研修会は、小中別のグループ協議であったが、2つの事例発表を基に校種の壁を越えた、人材育成の協議ができた。今後もこのような形での教育研究大会を続けていければと思う。

# 第4分科会(小学校・学校の危機管理)記録

提言テーマ「安全・安心な学校づくり」

～子ども・学校を危機から守るために大事なこと～

提言者 [嬉野市立五町田小学校 橋本 澄子]

司会者 [唐津市立第五中学校 宮田 稚子]

記録者 [嬉野市立塩田小学校 川原 俊彦]

## 【研究協議題】

- ・ 児童・生徒、職員そして学校を危機から守るために、校長として大事にしたいこと。

### 1 質疑応答…なし

### 2 グループ協議報告・まとめ

#### (1) Aグループより

- ・ 危機管理対応は教頭在職時に経験することが重要。校長になってからでは遅い。
- ・ 教頭が法規を知らないこともある。市町教委主催の法規研修会を実施しているところもあるが、校長が教頭を育てる意識がまず必要。
- ・ 危機管理事案を校長一人で解決するのは難しい。校長としてネットワークを構築し、様々な視点から解決の糸口を探せるような手立てを考えておく必要がある。

#### (2) Bグループより

- ・ 危機管理事案対応の具体について職員間でずれが生じる場合がある。例えば、報告の時期（校長からすると遅い）、いじめ等について保護者に対する回答内容（担任と教頭が伝えたニュアンスの違い）など。
- ・ 保護者の状況も様々で同じ内容を伝える場合も相手に合わせた伝え方で対応する必要有り。引き出しの多さが重要。

#### (3) Cグループより

- ・ 未然防止、環境づくり、丁寧な対応等、安全・安心な学校づくりを進めている。校長としては最悪を考えて対応するが、職員には中々伝わらない。事故が発生したときには意識が高まるが、時間が経つと低くなる。職員の受け止め方に違いがあるのは仕方ないが、伝えていかなければならない。事例や法令を踏まえた対応を心掛けている。情報収集と判断の繰り返しである。

#### (4) Dグループより

- ・ 各学校の課題を出し合った。職員の危機管理に対する意識の向上が必要。そのための研修をどのように仕組みればいいのか、若年層の職員への啓蒙はどのようにしたらいいのか、試行錯誤を続けている。
- ・ 「保護者対応は管理職に入ってほしい」との声を聞くが、職員同士の組織力を高め、対応に当たってほしいとも思う。そのためには保護者対応研修も必要だと考える。

(5) まとめ

- 危機管理対応は多岐にわたる。想定外と思われる事案を想定内にしておきたいが、そうはいかないのも現実である。各グループから出された報告をまとめると初期対応（それまでの準備）をどのようにするのかということに尽きる。初期対応の重要性については兼ねてから言われていることだが、改めて大事だということが共有できた。

# 第4分科会(中学校・学校の危機管理)記録

提言テーマ「学校に求められる危機管理」

～ いま問われる 校長に必要な力 ～

提言者 [唐津市立相知中学校 牛草 美佳]

司会者 [唐津市立第五中学校 宮田 稚子]

記録者 [唐津市立小川中学校 伊東 泰弘]

## 【研究協議題】

- ・ 児童・生徒、職員そして学校を危機から守るために、校長として大事にしたいこと。

### 1 質疑応答…なし

### 2 グループ協議報告・まとめ

#### (1) Eグループより

- ・ 管理職の危機意識と職員の温度差を感じている。管理職が当たり前と考えていることが当たり前でないことがあり、管理職が自分の言葉で伝えるなど、タイムリーな指導が必要になる。
- ・ 危機管理能力を高めるための取り組みを職員だけで考えるのは難しい。校長の持っている情報を伝えることも必要である。
- ・ 判例や事例をあげて、グループごとに対応策を考えさせるような研修会を設定する。グループ作りも意図的にしている。
- ・ 保護者対応等のトラブル発生時に管理職まで報告が上がってくる。系統図を提示して組織をつくり、組織力をいかに高めていくかが課題。定例の三役会を設定し、情報交換や共有をする。
- ・ 管理職は危機管理に対して、常に最悪を考え、臆病であること。慎重でありすぎるくらいでよい。
- ・ スクールカウンセラーの活用として、職員のカウンセリングや新採のカウンセリングを実施している。本来は生徒のためのものだが。

#### (2) Fグループより

- ・ 情報共有とその速さは重要である。
- ・ 校長としての危機管理は職員管理ではないか。校長の危機管理意識を職員へ伝える難しさがある。
- ・ 市教委主催の教頭研修会で事例を共有し、合わせて現任校の教頭も指導していくことが必要。

#### (3) まとめ

危機管理対応は多岐にわたる。想定外と思われる事案を想定内にしておきたいが、そうはいかないのも現実である。各グループから出された報告をまとめると初期対応（それまでの準備）をどのようにするのかということに尽きる。初期対応の重要性については兼ねてから言われていることだが、改めて大事だということが共有できた。

# 第5分科会（小学校・今日的教育課題）記録

提言テーマ「自立と共生を図り実践的な態度を育む教育の推進並びに家庭・地域等との連携」  
～全ての子どもに対する学びの保障と充実を目指して～

提言者〔有田町立有田小学校 松尾 寛〕

司会者〔鳥栖市立鳥栖北小学校 長尾 真司〕

記録者〔伊万里市立松浦小学校 山崎 秀隆〕

## 【研究協議題】

- ・子どもの学びを保障するために、保護者と地域、教師がどのように連携しているか。
- ・小学校における若手職員の資質向上。

## 1 質疑応答

なし

## 2 グループ協議報告

### (1) Aグループより

- ・ 支援を要する児童については職員連絡会等で共通理解を図り、必要に応じてケース会議を開き、具体的な対応策を考え、実践している。
- ・ 会議は時間を制限して行い、放課後デイサービスなどの外部機関との連携を図っている。
- ・ OJT研修を行い、若手教員を指導助言者として資質・能力の向上を図っている。
- ・ 校内研究は個人でテーマを設定して個人研究に取り組ませている。

### (2) Bグループより

- ・ 地域行事で子ども自身が考えて参加する場があり、地域に支えられながら育っている。
- ・ 保護者が少ない地域は、教員と地域、保護者が連携する時間をつくることが課題である。
- ・ 毎年新規採用者が2名ずつ配置される学校では、若手はその思いを聞き、周囲に協力を呼びかける役割を担っている。
- ・ 学習指導要領に基づき、指導のねらいを明確にさせて授業に取り組ませている。参観者は、授業の視点を共通理解したうえで助言を行っている。

### (3) Cグループより

- ・ 特別支援教育コーディネーターを中心に課題を明らかにし、支援の方向性を見出している。
- ・ 職員、民生委員、地域の方々、専門家など様々な立場の方が支援に関わる情報を入力することで個別の支援計画の方向性を示すことができる支援ソフトを導入し、活用している。
- ・ 通常学級担任と特別支援学級担任のどちらも経験させ、自己有用感を高められるような適材適所の配置を考えている。

### (4) Dグループより

- ・ 同地区内の学校での情報共有や支援体制を統一する取組はとても参考になった。ただし、各学校の現状や学校規模によりケースが異なり、それぞれに応じた対応策も必要である。
- ・ 児童個人のデータ共有や管理、分析による個別支援の対応は、若手教員にとってはとても有効であると感じた。

# 第5分科会（中学校・今日的教育課題）記録

提言テーマ『AIを活用したセーフティーネット』に係る学校での取組

～小・中連携の視点からのマネジメント～

提言者 [みやき町立三根中学校 江島 裕章]

司会者 [鳥栖市立鳥栖北小学校 長尾 真司]

記録者 [みやき町立中原中学校 田中 克三]

## 【研究協議題】

- ・子どもの学びを保障するために、保護者と地域、教師がどのように連携しているか。
- ・小学校における若手職員の意識向上。
- ・（中学校）多様化する課題を抱える生徒に関する情報共有の在り方。

## 1 質疑応答

なし

## 2 グループ協議報告

### (1) Eグループより

- ・大規模校の連携はどうしても漠然としがちである。学校全体で開発的生徒指導を進め、生徒の中からリーダーを育て、校則改正など主体的な活動に取り組みさせていくことが大切である。
- ・生徒指導主事や学年主任をいかに育てるかが重要であり、「リーダーシップを発揮しない」、「学年を把握していない」主任の場合、保護者対応等で苦勞することが多くなる。
- ・小規模校においては、児童生徒の特性や人間関係に関することについて小中の職員が互いに情報を共有し、把握するようにしている。また、コミュニティ・スクールの組織も協力的で役立てている。
- ・情報共有の方法としては、何かあればパソコン上の共有フォルダに入力し、定期的な部会・協議会で対応を協議している。
- ・問題事案等が発生した際の「初期対応メモ」を全職員が日常的に共有できるようにパソコンのデスクトップ上にアイコンを作成し、「いつ、誰が、どんなことをして、どのように対応したか」を入力する体制をとっている。その情報をもとに、管理職からどの職員がグリッして対応するか指示をするようにしている。

### (2) Fグループより

- ・校長会の自主研究会において、特別支援教育に関する課題の見直しを図るために、各教師へのアンケートを実施したり、保護者、有識者、退職校長、現職担任等から話を聴く機会を設けたりしている。
- ・町がAIを活用して様々なリスクの可能性のある児童生徒を洗い出し、適切な対応や関係機関への連携を指示してくれるシステムを導入し、小から中へのデータの共有を行っている。
- ・校内でのスクリーニング会議で気になる生徒の日頃の様子等について情報交換を行う中で、ベテランの培ってきた観察眼や生徒への関わり方等について、初任者や若手職員への継承がなされている。
- ・生徒に関する情報共有の方法については、生徒指導部会を時間割の中に位置づけたり、月1回の全職員による生徒指導協議会を実施したりと学校の実情に合わせて工夫し、実施している。
- ・共有した情報がなかなか学年に下りていかないという課題があったため、職員の昼休みを分割して学年会の時間を確保したり、生徒の登校完了時刻と職員の勤務開始時刻をずらして打ち合わせの時間を確保したりするなどの校時の工夫を行っている学校の実践も参考にしたい。

令和6年度 研究部員及び研究部対策委員一覧

役職名	地区名	氏名	学校名
部長	(県校長会理事会)	長野篤志	みやき町立北茂安小学校
副部長	〃	貞松弘人	白石町立白石中学校
部員	〃	福田哲也	有田町立曲川小学校
〃	〃	原田浩臣	神崎市立千代田中学校
幹事	〃	林寛	上峰町立上峰小学校
対策委員	鳥栖基山	長尾真司	鳥栖市立鳥栖北小学校
〃	三養基	原徹也	みやき町立三根東小学校
〃	神埼	平山忠直	神崎市立千代田中部小学校
〃	佐賀市	原口浩一	佐賀市立春日小学校
〃	小城多久	西村雪彦	小城市立三日月小学校
〃	唐津	宮田稚子	唐津市立第五中学校
〃	伊万里市・西松浦郡	山口浩史	武雄市立山代東小学校
〃	武雄市	田中政紀	武雄市立北方中学校
〃	杵島郡	山領ひとみ	白石町立白石小学校
〃	鹿島嬉野藤津	松本博紀	鹿島市立古枝小学校
事務局長		江口浩文	佐賀県小中学校校長会事務局
事務局員		小川裕子	〃

佐賀県小中学校校長会事務局

〒840-0814

佐賀市成章町2-16 (財団法人佐賀県婦人会館内3F)

TEL・FAX (0952) 24-8669

E-mail kouchoukai@wing.ocn.ne.jp